

同伴分動態

2025.4.2(水) – 5.6(火)

BUG

ごあいさつ

BUGは、アーティスト／アートワーカーと協働し、キャリアを支援するための拠点として2023年9月に開館し、それ以来、「アートセンター」にできることを想像し、実践してきました。

今回は「同伴分動態」と題し、うらあやか、小山友也、二木詩織、宮田明日鹿の4名のアーティストによる、作品展示とイベントを開催します。本展では、他者と関わり合いながら、互いの考えや物事の枠組みを再編成してこしらえる行為や思考に光をあてます。同伴分動態とは、「同伴」「分動」「態」の三つの言葉を組み合わせた造語です。ある人たちが居合わせ、同伴しながら、それぞれが分かれて自由に動く、態（様子、ありさま）を意味します。

参加する4名のアーティストは、コミュニティの運営や他者の表現のサポートなどをして働きながら、制作を続けてきました。うらはパフォーマンスやワークショップ形式の作品を発表することで、「参加」という概念を経由し、外部的なものとの共立の様相を探ります。二木は、職場で滞在制作するかのような経験を通じ、継続される日常と成果物として固定化される作品という異なる時間軸のあわいにある表現を模索しました。宮田は、「誰も排除されない食の実践」から政治を考えようとしながら、手芸や農業といった生活のための技術を使って人々の交差する場を作ります。小山は、展覧会の周りにおける様々な構造を確認し、その枠組みを作品によって「生」という視座から指摘します。そしてBUGは、アーティストや作品に伴走し、それと呼応しながら本展をつくることで、アートセンターとしてのあり方を形作ってきました。

今回は、訪れた人が思い思いにふるまえる空間をつくりました。同伴・分動することで見えてくる、同時代的な芸術実践による4名の多様な視点からなる作品をお楽しみいただくと共に、BUGのこれからの歩みにも思いをめぐらせていただく機会となれば幸いです。

コ・キュレーション

うらあやか、野瀬綾 (BUG)



写真撮影OK



映像一部撮影OK



お手触れNG



防犯カメラ作動中

作品リスト 各作品について、作品タイトル/制作年/素材・作品形式/サイズを記した。全てアーティスト蔵。

1,10
 小山友也
 制圧する看視員
 /されるアーティスト
 2025
 1920×1080px
 ① 5分9秒
 ② 6分52秒
 ③ 9分23秒
 ④ 5分36秒
 ビデオ

2
 小山友也+野瀬綾
 「生を行動で満たさずに、
 空白に向けて行為を再編成する」
 ためのPDCAサイクル
 2025
 サイズ可変
 紙にインクジェットプリント、
 ネームホルダー

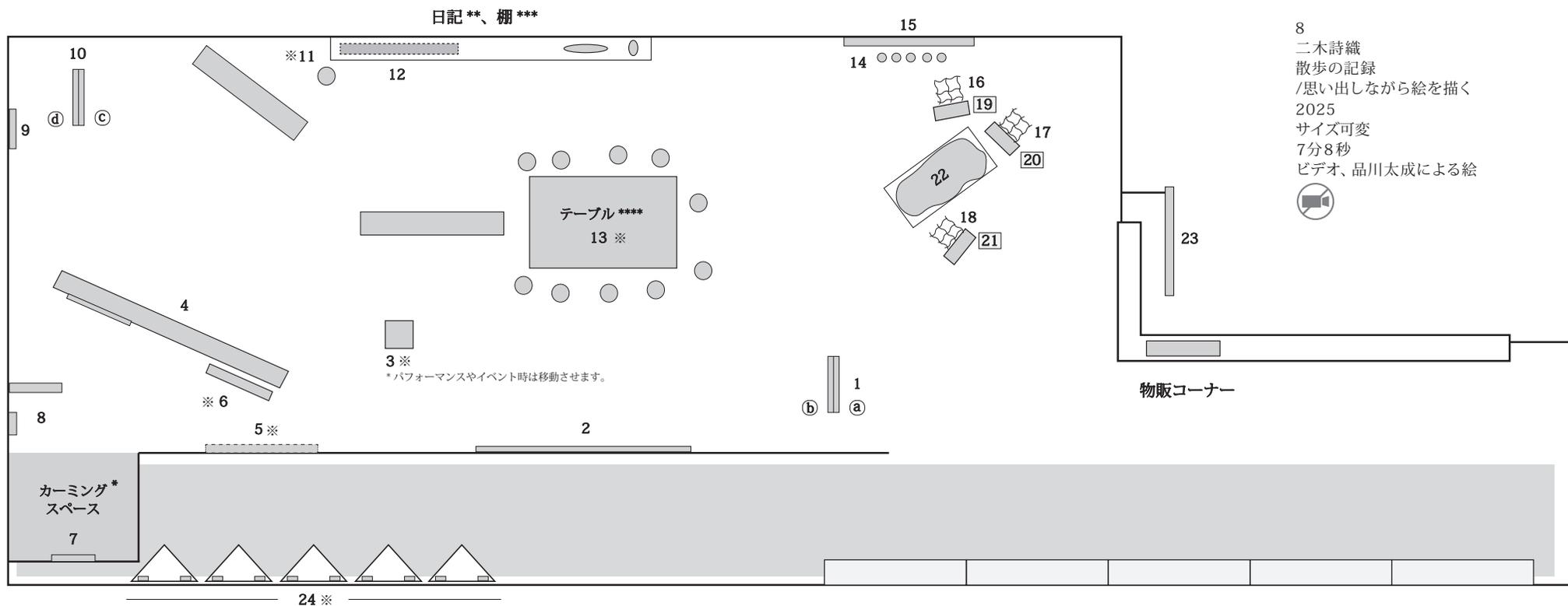
3
 うらあやか
 こ.っ.か.て.ん.ぶ.く.の.アイ.デア
 2025
 パフォーマンス
 ※P.5に上演日を記載しています。

4
 二木詩織
 散歩の記録
 /それぞれのまま一緒に過ごす
 2024~2025
 サイズ可変
 64分20秒
 ビデオ・写真

5
 二木詩織
 やりたいことリスト
 2025
 サイズ可変
 壁にクレヨン、ペン
 ※このリストは会期中
 やりたいことが追加されていきます。

6
 二木詩織
 今日までの出来事
 2025
 サイズ可変
 ビデオ
 ※この映像は会期中更新されていきます

7
 うらあやか
 スキルマイニング：
 譲/求/保（植物の形質から）
 2021
 紙にインクジェットプリント



8
 二木詩織
 散歩の記録
 /思い出しながら絵を描く
 2025
 サイズ可変
 7分8秒
 ビデオ、品川太成による絵

おじさんとうた ぶらんこ カメラ
 みやかわさん はぶちさん おおくらやま
 ラーメン ちゅうがっこう るいさん
 マイク うとさん そろばん 二木さん ピザ
 マンション おしゃべり くるま でんしゃ
 しゃしん おかあさん みかん木 たにもとさん
 2025
 54.5×39.3cm
 画用紙、色鉛筆
 絵の作者：品川太成（しながわ たいせい）

9
 うらあやか
 鑑賞者のためのノート
 (雲の中の小さなイナズマ)
 2025
 72.8×103cm
 ドローイング

11
 二木詩織
 観葉植物の時間
 2025
 (観葉植物3種、3~7点)
 黒法師、ゴーレム、
 ゲラルダンサス・マクロリザス
 ※会期中に二木が水やりを行います。

12
 小山友也
 Potato3
 2023
 1920×1080px
 6分54秒
 ビデオ

13
 うらあやか
 すべての水曜日は
 アマチュアで
 ごく個人的なことのために
 2025
 ワークショップ
 ※毎週水曜にテーブルで開催

19,20,21
 宮田明日鹿
 「ちいさな庭で」スナップエンドウ
 2024~
 サイズ可変
 スナップエンドウの種、
 水、日向土、培養土、
 アクリルプランター

22
 宮田明日鹿
 「ちいさな庭で」植物と土のラグ
 2024~
 約60×170cm
 糸(ほぼウール、シルク、
 ナイロン、アクリル、モヘア等)
 樹脂、裏地レーヨンネット

23
 小山友也
 展示会のエンドロール
 2025
 1440×1080px
 7分41秒
 ビデオ

14
 宮田明日鹿
 「ちいさな庭で」
 庭でとれたものとか
 2020~
 サイズ可変
 植物、種、石、木など

15
 宮田明日鹿
 「ちいさな庭で」
 落ち葉堆肥の
 切り替えし実技記録
 2024~
 サイズ可変
 14分28秒
 ビデオ

16,17,18
 宮田明日鹿
 「ちいさな庭で」
 スナップエンドウのためのネット
 2025
 約60cm×500cm
 サイズ可変
 糸、テグス

24
 小山友也
 「表現しない」
 ・可能な限りの悪事を考える
 ・数をかぞえる
 ・今までで最もロマンティックなLOVEを思い出す
 2025
 パフォーマンス
 ※週末に不定期で路上パフォーマンスを上演します。



※作品の協力情報と*の付いているスペースの説明は次ページに記載

スペースについて

カーミングスペース*

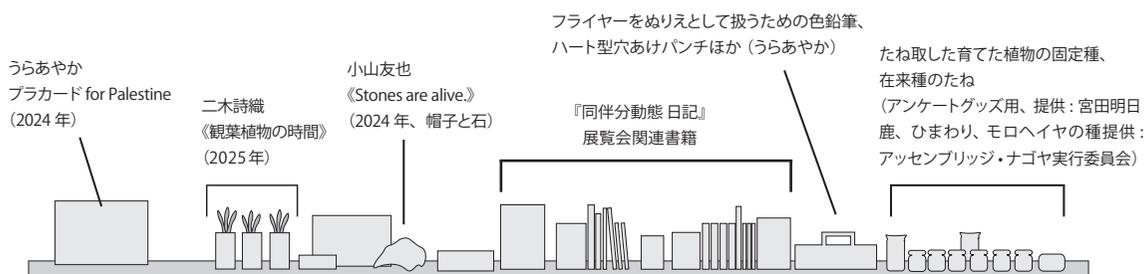
展示の刺激に疲れた方や授乳したい方、遊ぶ場所のほしい小さなお子さまなど、どなたでもさまざまな用途でご利用いただけます。ご利用の際は、受付スタッフまで一言お声がけください。

日記**

2024年4月から2025年2月までにアーティスト/キュレーターが書いた日記をまとめて冊子にしました。それぞれの生活や制作に関すること、モヤモヤとした悩みやつい考えてしまうことなどが綴られています。配布はしておりませんので、会場内でご覧ください。

棚***

日記の冊子や選書が配架されています。また、ビンに入っている種は、受付でアンケートに回答いただいた方へ、特製ポチ袋と一緒にプレゼントします。受付では物販も行っておりますので、ぜひ帰りにお立ち寄りください。※棚の配置は変更になる可能性があります。



テーブル****

腰をかけて日記や書籍を読んだり、休憩したりと自由におすごしください。ワークショップやパフォーマンスで使用することもあります。

作品協力情報

1.10. 制圧する看視員 / されるアーティスト

協力: 大槻英世、加藤 香央里、川瀬 裕子、城間 雄一、畑山 樹、堀田 ゆうか

3. こ.っ.か.て.ん.ぶ.く.の.アイデア

パフォーマンス共同研究・出演: 井口 美尚、橋元 千里、小峯 篤朗、中村 梓希、阪口 智章、綱川 知里、豊永 武蔵

4. 散歩の記録 / それぞれのまま一緒に過ごす

撮影・出演・協力: 社会福祉法人かれん アートかれん利用者・支援員の皆様
撮影・編集協力: 宮川知宙

14. Potato3

協力: BUG Cafe

15. 「ちいさな庭で」落ち葉堆肥の切り替えし実技記録

撮影: 福田直輝 / 編集協力: 小山 友也 / 映像編集: 大野 高輝

20,21,22. 「ちいさな庭で」スナップエンドウ

プランター製作協力: sumie、宮園夕加 / 生育アドバイス: 橋本力男、土、スナップエンドウ生育後引取り先: THE HASUNE FARM、富永悠

23. 展覧会のエンドロール

協力: うらあやか、野瀬綾、二木詩織、宮田明日鹿



- a. うらあやかイベント「すべての水曜日はアマチュアでよく個人的なことのために」
4月2日(水) テーマその1「嘘をつく」、9日(水) テーマその2「お金」、16日(水) テーマその3「気まずい」、
23日(水) テーマその4「子ども時代」、30日(水) テーマその5「外」 16:00-17:30頃まで(終わり時間未定)
毎週水曜はうらあやかが在席し、「アマチュアでよく個人的」な表現と言論についてのワークショップを行います。
- b. 出展アーティスト4名によるトークイベント★
4月4日(金) 19:00-20:30
- c. うらあやか作品のパフォーマンス実施日
4月5日(土)、6日(日)、12日(土)、13日(日)、18日(金)、19日(土)、20日(日)、27日(日)、
5月2日(金)、3日(土)、4日(日)、5日(月) ※13:00-19:00の間に不定期で上演します。
- d. 大槻英世・小山友也によるワークショップ★
4月20日(日) 14:00-16:00
- e. 宮田明日鹿による「スナップエンドウを採る会」
4月24日(木) 13:00-14:00、18:00-19:00 / 5月6日(火) 12:00-13:00
※スナップエンドウの生育状態次第では、内容が変更になる可能性があります。
- f. 宮田明日鹿による「ネットのようなものを編んでみる会」
4月25日(金) 13:00-15:00、17:00-19:00
- g. 橋本力男×宮田明日鹿によるトークイベント★
4月26日(土) 14:00-15:30
- h. 集まって日記を書く、そして読み合う会★
4月30日(水) 18:00-19:30 / 5月3日(土) 10:00-11:30
- i. 大澤拓実×小林晴夫×小山友也によるトークイベント★
5月2日(金) 18:00-20:00

展覧会詳細



BUG

作品について

うらあやかは、計算不可能な外部をいかにして感覚し、受け入れ、ともにサバイヴしていけるかの試みを軸に、他者や他の生物との関わり合いを扱ったパフォーマンスやテキスト、ワークショップ、映像など複数のメディアを用いた作品を制作しているアーティストです。本展では、野瀬綾（BUG）とともにキュレーションを務めました。

《こ.っ.か.て.ん.ぶ.く.のアイデア》は、会期中14日間に渡って、6名のパフォーマーとうらが対話とダンスを用いて、パフォーマンスを上演する作品です。これには希望者も参加できます。この作品では、既存の国家構造からゆっくりと”みんな”で抜け出るために、答えの出ないことを対話しながら思考の枠組みを外す練習を行います。パフォーマンスは、毎回、「NOとYESの練習」から始まり、一時的に有効な他者との許容範囲を探ります。そして、疑問から導かれたいくつかのテーマについての対話とアクションを行い、作品タイトルである「国家てんぶくのアイデア」の対話へと一日かけてゆっくりと移行してゆきます。会場にある墓石のような見た目の木製の可動式看板には、パフォーマンスで取り扱ういくつかの議題が書かれています。この看板は、パフォーマーが不在の日、もしくはパフォーマンス途中に来た人を引き込むためにも機能します。

展示室奥にある《鑑賞者のためのノート（雲の中の小さなイナズマ）》は、うらが書き貯めてきた日記やメモを再編成し制作された、ドローイング作品です。鑑賞者や他者についての思考の中で出現した「主語となる単語」を繋ぐ青い線は「イナズマ」のように描かれ、表記のゆれや断片的なアイデア、断言できない曖昧なことが記載されたテキストは「モヤモヤ」とした雲のように捉えることができます。うらはこれまでに参加型パフォーマンスの作品を発表してきた中で、主語や他者への呼びかけ方に関心を持ち続けてきました。そこには、自身が制作する参加型パフォーマンスに「参加できない存在」、広報が届かない人やこの世を去った人への意識が含まれます。

また、《すべての水曜日はアマチュアでごく個人的なことのために》は、「アマチュアでごく個人的」な表現と言論についてのワークショップが行われます。アマチュア性や個人的なことを歓迎する背景には、オーガナイズするうら自身が参加者の影響によって変化することへの期待があります。

今作の全体を通して、うらは外部的なものとの共立の様相を探っています。

うらあやか Ayaka URA

1992年神奈川県生まれ。

主体性や責任の移動に関心をもち、参加型のパフォーマンス作品を多数制作。近年の個展に「マルチタスク」（武蔵野美術大学gFAL、東京、2023年）、「貝の/化石が/跡を残して/化石の/雛型/となった/身体」（金沢芸術村PIT5、石川県、2021年）。グループ展に「勝手に測る、挟まる、抜け出す」国際芸術祭「あいち2022」（愛知県美術館、名古屋、2022年）などがある。

<https://urayaka.jimdofree.com/>

<https://www.instagram.com/urayaka/>

インタビュー映像

2024



2025



小山友也は、人間、動物、もの、社会システム、風景などとの間にあるコミュニケーションを、自身の身体を通して観察し、パフォーマンス、ドローイング、映像、テキストなどによって可視化させるアーティストです。

二つのモニターが背中合わせに配置された映像インスタレーション《制圧する監視員/されるアーティスト》では、二名の人物（あるアートセンターのスタッフと小山自身）がコンタクトし、組み合う護身術によって「制圧」が行われるまでの様子がスローモーションで再生されます。一連の制圧の動きを収めたショットが引き伸ばされる間、相対するふたつの身体は互いに作用し合った構造として組み合わせたり、1コマずつ短い静止を繰り返します。他方の攻撃を受け流しながら制圧に転ずるフォームと、受け身を取ろうとする「負けるため」のフォームのファイト・コレオグラフィーは大槻英世（アーティスト・空道黒帯）と小山が共に作りました。

ネームホルダーに収められたテキストの作品《「生を行動で満たさずに、空白に向けて行為を再編成する」ためのPDCAサイクル》は、分業制、行動の形骸化、輸送と散歩、労働と制作の違いなどについて、小山と野瀬（BUG）が対話を行いながら制作されました。異なる立場から制作されたテキストは、理知的なものもあればポエティックなものもあり、ときに反省の意を滲ませ、ときに論ずるように鑑賞者に語りかけます。これらの言葉は一見、不統一に映りますが、いずれもビジネスのフレームワークとして使われる「Plan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Action（改善）」という一連のサイクルに組み込まれています。しかしながら、この作品におけるPDCAは、業務の改善や目標の達成を目指すのではなく、「人生を形骸化した行動で満たさずに生きること」や「目的に行動を従属させないこと」を実現するための方法として提案されています。

《パフォーマンス「表現しない」》は、「可能な限りの悪事を考える」「数をかぞえる」「今までで最もロマンティックなLOVEを思い出す」という3つのトピックをBUGの前の路上で上演するパフォーマンス作品です。この3つは、「脳内の活動であり、外部からは観測できない」という点で共通しています。通行人に紛れながら不定期に開催される、かつ、動きが可視化されにくいこのパフォーマンスは、鑑賞者（もしくはたまたまカフェの席に腰をかけた人）の想像力を駆動させる装置として働きます。

《Potato3》は、BUG Cafeのキッチンで撮影されたパフォーマンスビデオです。過去にも小山は自宅のキッチンでこのシリーズを撮影してきました。ドラマチックな照明をつけたキッチンで、ジャガイモが隕石のように見える動き方を試したり、画面の淵を彷徨わせたり、ゆっくりと動かしてみたりする手の様子は、まるで一緒に遊んでいるかのようです。この映像の中でジャガイモは、食品としての有用性と目的から外れ、宙吊りの存在となっています。

展示室の出入口頭上に設置された《展覧会のエンドロール》では、この展覧会に関わった全ての人物の名前が列挙されています。

本展において小山は、制作行為や展覧会、またビジネスパーソンの行動の構造的な組み立てを確認し、そこに手を加えて制作を行いました。これは展覧会という場を使って、既存の枠組みによって目的化された行動から、生を抜け出させる試みであると言えます。

小山友也 Yuya KOYAMA

1989年埼玉県生まれ。

交感の方法を分析・抽出・転用し、既存の枠組みに従属している身体の可視化と侵食を行い、未来と自由を模索します。近年の活動に、「SAYONARA-Mark II」（TOYOTA MarkII、東京、2021年）、「勝手に測る、挟まる、抜け出す」国際芸術祭「あいち2022」（愛知県美術館、名古屋、2022年）、「石_鑑賞と使用のための連続講座」（CSLAB、東京、2023年）などがある。

<https://yuyakoyama.net/>

https://www.instagram.com/yuya_koyama/

インタビュー映像

2024



2025



二木詩織は、映像や対話を用いた作品の制作を通して、目の前で起きたことに対する感覚を部分的に増幅させることを試みてきたアーティストです。本展では、自身が勤務する生活介護事業所の様子やそこに通う人々との関わりを映像や写真で展示します。

《散歩の記録/それぞれのまま一緒に過ごす》は、プロジェクションされた映像と写真からなるインスタレーション作品です。映像作品は、事業所恒例のお散歩にカメラと録音機材を持ち込み、お散歩に参加するメンバー（事業所に通う利用者、二木を含む事業所の支援員、映像撮影補助スタッフ）が互いに撮影した動画を繋ぎ合わせて制作されました。スクリーンの裏にかけられた4枚の写真は、撮影中に起きた「ちょっとショックだったこと」の記録写真です。

《散歩の記録/思い出しながら絵を描く》は品川太成による絵と、その制作過程を記録した映像からなる作品です。事業所に通う品川さんは、家族旅行やお出かけなどを思い出しながら絵を描くことを続けてきました。まず線で輪郭を描いたあと、色で埋め尽くしてゆき、最終的には抽象的な絵となります。裏面には、その出来事にまつわる単語や描いたものが言葉で羅列され、そのままタイトルとなります。その制作プロセスを普段から目にしていた二木は、絵の中に品川さんの経験のどのようなことがピックアップされるのかを知るために、今回は事業所恒例の散歩から絵を描いてもらいました。

スクリーン裏の足もとに設置された映像作品《今日までの出来事》では、事業所の利用者が絵や刺繍、手織りなどを創作する光景や、休んでいる様子が記録されています。この映像データは、日記のように会期中も更新される予定です。「職場で滞在制作しているみたい」という二木の言葉の通り、親密な関係を作品にして展示することは、日常をアーティストの視点で対象化することになります。継続される日常と成果物として固定化される作品という異なる時間軸の幅の中で、そのあわいにある表現を二木は模索しました。

会期中には、事業所の利用者とスタッフが二木と共に作品を鑑賞したり、「これからやりたいこと」を対話したりする日を設けます。対話から生まれた「やりたいこと」は、随時、展示会場の壁に《やりたいことリスト》として書き足されてゆきます。

二木は作品を制作するにあたり、参加者の許可を丁寧に取りながら進めてきました。そのコミュニケーションのプロセスや、これまでに築かれてきた関係性などがそれぞれの作品に反映されています。

二木詩織 Shiori FUTATSUGI

1993年神奈川県出身。武蔵野美術大学修士課程美術専攻油絵コース修了。

自身の体験をどう切り取るか、または編集するかをテーマにパフォーマンスや映像作品を手掛ける。

2019年から坂口佳奈と共に坂口佳奈+二木詩織として作品発表を継続している。近年の展示に、「RENEWAL NEWREAL 二木詩織/山本篤」(Art Center Ongoing、東京、2022年)、「そこら中のビュー」(坂口佳奈+二木詩織) (Gallery PARC、京都、2023年)、「Oozing Point -滲み出る地点-」(鹿児島県三島村硫黄島、2023年)がある。

<https://www.instagram.com/malmolko/>

インタビュー映像

2024



2025



宮田明日鹿は、編み物の手法を用いた作品の制作や、手芸をしたい人が集い、学び合う場をつくる「手芸部」のプロジェクトを国内各地で行っているアーティストです。6年前から家庭菜園をおこなう宮田にとって、野菜を育てることは生活の中で大きな割合を占める営みですが、作品として表現することは初の試みです。

映像作品《「ちいさな庭で」落ち葉堆肥の切り替えし実技記録》では、落ち葉堆肥の制作過程の協働風景を撮影しています。宮田は昨年から、生活と作品に共通するリサーチとしてコンポスト学校に通い始めました。堆肥を作ることは、世界に土を増やすこととなります。人間の出した生ごみや落ち葉、刈草、モミガラ、米ぬか、鶏ふん、牛糞、かべ土などを、微生物の働きによって堆肥となり、またそれを用いて野菜を育てることに繋がってゆきます。野菜ができた後は誰かとシェアをしたり、自分で料理をして食べたりと、生活と制作行為が円環を成してゆきます。そうした展開が展示室内でも起きることを期待して、今作では実験的にスナップエンドウを栽培することになりました。

《「ちいさな庭で」スナップエンドウのためのネット》シリーズは、農業用のネットを編み機とかぎ針で編んだ作品です。ピンク色のネットには、憲法13条の条文から、「国民」の語を取り除いて再編成した「生命、自由及び幸福追求に対する権利」という言葉と、宮田の家で収穫したスナップエンドウの写真から抽出した柄が編み込まれています。黄色のネットに、「個が個であるための、連帯と協働」という文章に加え、パレスチナの伝統的な刺繍のモチーフであるスイカ、種の貯蔵庫と、宮田のドローイングによる白いポピーとオリーブの柄が編み込まれています。

制作の背景には宮田の、「国民」という定義への疑問と、「世界市民としてみんなと考えたい」という思いがあります。憲法の内容や、市役所や駅で人権宣言を掲げる看板がよく目に留まるようになった自身の変化についても思いを巡らせながら、そのステートメントの書かれたネットを使って、展示会場内でスナップエンドウを育てます。ステートメントに、成長していくスナップエンドウのツタが絡んでいくことは、植物との協働によって言葉に命を吹き込む試みだともいえるでしょう。会期中には、そのスナップエンドウを収穫し、会場にいる人たちと食べるイベントを企画しています。

スナップエンドウの中央にあるラグマット作品《「ちいさな庭で」植物と土のラグ》は、来場者が腰をかけることができます。ラグマットの図柄は、宮田の家の畑で育てているねぎぼうず、ダイコン、にんじん、あずき、そして畑の様子が描かれています。

「食」が関連する宮田の作品には、「誰も排除されない食を実践すること抜きに政治は考えられない」という態度が通底しています。

宮田明日鹿 Asuka MIYATA

1985年愛知県生まれ。桑沢デザイン研究所ファッション科テキスタイル専攻修了。

テキスタイル、ファッション、手芸、美術の領域を横断しながら、改造した家庭用電子編み機、手編みなどの技法で作品を制作。歴史的背景を参照しながら、手を動かすこと、人についてリサーチを重ね、顧みることなく継承されてきた習慣や風習に疑問を投げかける。手芸文化を通して様々なまちの人とコミュニティを形成するプロジェクトを各地で立上げている。近年の主な展覧会に、国際芸術祭「あいち2022」(愛知、2022年)、「ひらいて、むすんで」(岡崎市美術博物館、愛知、2024年)。手芸部プロジェクトに、「港まち手芸部」(愛知、2017年～進行中)、「金石手芸部」(石川、2021年)、「有松手芸部」(愛知、2022年)、「せんだまち手芸部」(広島市、2023年)「本町手芸部」(石川、2024年～進行中)など。

<https://asukamiyata.com/>
<https://www.instagram.com/asukamiyata/?hl=ja>

インタビュー映像

2024



2025



キュレーション・ノート

うらあやか

展覧会に向けたプロジェクトとして、それぞれがリサーチを行いました。それに同行し、そこで得たことからキュレーションに反映したことを紹介します。

宮田さんはコンポスト学校に通いました。そのリサーチに関連して、都市型循環型農園「THE HASUNE FARM」での援農に宮田さんと野瀬さんと一緒に行った際、「コンパニオン・プランツ」を知りました。コンパニオン・プランツとは、特定の植物を一緒に育てることで、互いの成長を助けたり、害虫を防ぐ効果を持つ植物のこと。たとえば、トマトにとってのバジルなどがコンパニオン・プランツにあたります。共栄作物、共生植物、共存作物と呼ばれ、食べる際にもいい組み合わせになる場合が多いそうです。「きゅうりを育てるための支柱を買うのがまどろっこしいので、とうもろこしと一緒に育てて、その茎を支柱に転用して巻きつかせる」というのは、害虫や栄養の面における共栄的な組み合わせではありませんが、人間が介在して植物を育てるという場における第三者介在の共栄性があります。このように、畑ではひとつの空間にいろんな機能が点在して、影響を与え合いながら実験的に育てられていました。この畑での学びから展覧会のコンセプトを深め、また異なるものを分けて整然と陳列せずにぽつぽつと並べる共生的な展示室のイメージとして参考にしています。

小山さんはオルタナティブな美術教育について複数の場所や機関にインタビューをしました。インタビューの質問事項を考える中で、「片付けについて聞くのはどうか」という話になりました。オルタナティブな美術教育のためのスペースは多数の人が出入りするオープンな場なので、展示や制作が日常です。そこでは、誰のものなのかわからない、作品なのかも判然としないものがどんと溜まってゆきます。そういったものや、共有の機材をどのように配置したり扱ったりするのかという施設管理の指針は、空間を介し、間接的かつ協働的に教育の内容を方向づけることにつながっています。そういった教場では、一方向的な指導ではなく双方向的な学習が目指されており、囲んだ人々の声がマイクなしに届き合う程度に大きなテーブルや、人数分の椅子が採用されます。また外周的な席として、立ち寄りやすい形状と位置にベンチが配置されることもしばしばあります。この設えを展覧会場でもサンプリングし、アートセンターの一つの機能として仮定した「ただ居ること、集まること」への作用を実験しています。

二木さんは複数の障がい福祉サービス事業所を視察しました。二木さんの制作を考えるために、私の方でも色々な人に話を聞きました。障がいを持つ人は、展覧会をはじめとした様々な場に立ち会う機会が、障がいを持たないひとと比べてものすごく少ないので、難しさに臆せず、その機会をいかにつくるかという視点を得ました。そこから、作品に登場してもらうことについて、映像ならプレ試写会をして家族や関係者にも安心してもらう、また、遠足で来れるようにする——「来る」というアクティビティを作品や展覧会のメインの機能にし、映像作品はその過程にあるというようなつくり——などのアイデアを出しました。実現にあたり、一気に許可取りしようとするのが難しくなるので、一人ずつのことを考えていきながら、実施に向けて動くことになりました。展覧会のイベントには、広報を行わずに事業所の方々に参加してもらう催しがいくつかあります。これは、アートセンターに継続的に訪れることが「自分の場所」という意識を含みうるのかという実験です。こうした取り組みは、みるべきものとしてのパフォーマンス作品ではなく、偶発的に居合わせることが可能な状況を作品と同じようにつくってみることで、展示室に複層性を与え、訪れた人自身が鑑賞体験の横にあるできごとと合わせて経験することに光をあてる試みでもあります。

私うらは、集まりの手法やパフォーマンス作品を制作するアーティストたちを誘って、抵抗の表現とパフォーマンスの研究会を行いました。ボディランゲージで会話を試みた際、はたから見ると会話が成立しているように見えたり、会話を行う個人間でも意思疎通が取れていると感じたり、また他の参加者は会話に齟齬が生じているにもかかわらず、コミュニケーションが取れていると感じ、ボディランゲージでの会話が進んでいったりすることが起きました。しかし発話による答え合わせを行うと、会話はそれぞれが思っていた通りではなく、話題が散らばっていました。そうしたリサーチを通して、パフォーマンスやイベントが行われる場所や時間の外にいる鑑賞者に向けた——美術的な用語では、サイト・スペシフィック性、タイミング・スペシフィック性、そしてオーディエンス・スペシフィックとでも言えばいいのか、そうした3つの視点の共立的な地点を探って——協働的な実験室として、展示室ないしはアートセンターの機能を持たせるべくこのテキストを執筆しています。

展覧会設計にあたっては、BUGがアートセンターであることが通りがかる人にもわかるような文言をガラス面に書きました。また、リサーチ期間には『ゲリラ・ガーデニング』の読書会を展覧会メンバーで行いました。この読書会がアンケートグッズの着想につながっています。展覧会へのアンケートに回答していただいた方は、宮田さんが収集している種を品川太成さんが描いた散歩の絵の封筒に入れて、持ち帰って（交換して）いただけます。カフェメニューについてBUG Cafeの方々と話をする中では、パレスチナのレシピをシェアし、パレスチナ料理をリサーチしてもらい、レセプションイベントでムハッサンを提供していただきました。キュレーションをすることが、こうしたやり取りを行う機会にもなるということをととても嬉しく思います。搬入中には、近くで行われるデモにいつでも行けるようテーブルの上にプラカードを置き、そのテーブルを囲んで作業を進めました。

こうした日々につながって展覧会が行われているということを経験するために、このテキストを日記の補足にかえて。

2025年3月29日



同伴分動態

会期：2025年4月2日(水)－5月6日(火)

主催：BUG

出展作家：うらあやか、小山友也、二木詩織、宮田明日鹿

コ・キュレーション：うらあやか、野瀬綾（BUG）

運営：野瀬綾、飯野優美（BUG）

制作：飯野優美、堀田ゆうか（BUG）

広報：野瀬明子（BUG）

告知物デザイン：明津設計

翻訳：鈴木梨穂

会場・インタビュー撮影：阪中隆文

設営：小滝タケル、加藤広太、鈴木基真、砂田百合香、成田輝、

開田ひかり、松尾駿太郎、森洋樹(square4)